

Title	「海馬」「記憶」の語から派生するイメージについて：「ドレフュス事件」に因んでレイナックに贈られたガレ「海馬文花器1901」のメッセージに関する考察
Author(s)	太田, 妙子
Citation	大阪外国語大学論集. 34 p.161-p.176
Issue Date	2007-03-09
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80001
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「海馬」「記憶」の語から派生するイメージについて
—「ドレフュス事件」に因んでレイナックに贈られた
ガレ「海馬文花器 1901」のメッセージに関する考察—

太田 妙子

Images Derived from the Word of Hippocampus and Memory
—An Inquiry into the Message of Hippocampus 1901
Sent by Galle to Reinach after the Dreyfus Affair—

OHTA Taeko

In the year 1901, Emile Galle gave the questioned vase to Reinach as a symbol of homage due to the result of the “Dreyfus Affair”. The vase was inscribed with 〈Vitam impedere Vero〉 from its creator Yvenalis. Although this specific inscription is clearly where the message lies, recently, the actual symbol of the design on the vase has been undergoing detailed examination from people from all walks of life; and has resulted in new opinions of the actual message of the vase. However, my opinion differs from these views, and, in addition, I will present my objections to the proliferating false journalism and media surrounding this issue.

First, during the era in which Galle lived, common knowledge surrounding the brain and its functions was severely limited. Furthermore, information on the relation between the hippocampus and memory had not even been proven.

Next, the anatomical term hippocampus being used as a term for the brain structure was coined by J. G. Arantio (1530–1589) in Italy. He termed it such as the hippocampus resembles the image of Poseidon riding a seahorse.

If, however, there was some sort of connection between the hippocampus as a part of the brain and the vase gifted to Reinach, the fact that the hippocampus is one of the brain’s centers for short-term memory would definitely be an awkward choice for a gift symbolizing something needed to be remembered.

In conclusion, I consider that there is no relation between the memory function of the brain and 「Vase Hippocampus 1901」. The figure of Galle’s was simply made for design purposes, as a result making it independent from the memory.

〈Key word〉 Hippocampus, Emile Galle, Dreyfus Affair, hippocampus and memory

〈はじめに——時代はアール・ヌーヴォー〉

言葉はしばしば使う方と聞く側でズレをきたすものである。正確さが大切な学問の分野では「表す意味」の変質や断層を避けるためあらかじめ用語を定義する。思考や判断の前提となる専門用語、言葉の意味を厳密に規定し共通の土台と認識をまず決めて論ずることが多い。そうしないと知見の基盤が脆く議論の積み重ねが困難となる。

一方日常用語ではあまり厳しく限定しない方が人間関係をスムーズにすることもある。生活上で婉曲的な表現や曖昧さから生まれる「言葉のあや」というものにはそれなりの効用もある。しかし言葉の意味が曖昧であるということは相互に都合の良いように解釈できるということである。拡大解釈・願望ひいてはそれが誤解・曲解となって伝えられてゆく危険は免れない。言葉が一般用語となり、ましてジャーナリズムやマスメディアが関ってゆくとすれば生じた解釈のズレが及ぼす波紋や影響は大きい。風評や風説の怖さである。時代の〈流行語〉から影響して美術評論上の「言葉」の扱われ方から筆者が疑問に感じた点について考察した。まことしやかに説明されている見解に実は時間認識の誤解があるのではないか、そんな視点と不安から考察を試みたのが本論文である。

19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランスに起こった「ドレフュス事件 (Affaire Dreyfus 1894-1906)」という冤罪事件がある。当時のフランス軍がドレフュス大尉に対してドイツへのスパイ行為をしたという嫌疑をかけた。彼の無罪を信じた多くの文化人がドレフュスの人権擁護、再審請求運動に参画した。エミール・ガレもその一人だった。同志の中でも尽力したレイナック弁護士に対しガレは賛辞を込めて「海馬文花器」(1901) (図-1 パリ装飾美術館所蔵) を贈呈した。贈られたそのガラスの花瓶には〈Vitam impedere Vero〉(真なるものにいのちを賭ける)^{注1}という『サトゥラエ』(ユウェナリス著) (文-3, 文-17) 由来の詩句が彫り込まれた。ガレがレイナックに捧げたオマージュの記念碑としても名高く現在パリ装飾美術館所蔵である。この作品に関して近年 Bertrand Tillier が著した『エミール・ガレ——ドレフュス事件』(文-32) の中に次のような一節がある。この「海馬文花器」に関する部分で (P-75) ちょっと長くなるが逐語邦訳 (関口煜^{注2} (元ソルボンヌ大学・パリ第6大学教授) による) を引用する。

「1901年にガレはタツノオトシゴを画いた花瓶をまた一つ制作して、これを1898年以来親交をむすんでいたジョセフ・レナックに献じた。この作品の下部にはユウェナリスの言葉から引用した〈真なるものにいのちを賭ける〉という書きこみが——この引用文は嘗てジャン・ジャック・ルソーの座右銘にもなったものだが——彫りこまれてあった。ガレはこの花瓶をレナックの『ドレフュス事件史話』の第一巻出版の際に彼に寄贈した、と見るのが當っているようだ。というのは、この時期 [1901年を指す] 該事件 [自体] の特別な時点のどれにもあたらないからだ。どうやらアンリエット・ガレ・グリムの一通の手紙がレナックにもらしている言葉「うちの主人もわたしもあまりに短かったあなたのご来訪のことをよく思い出すのでした」という言葉が裏付けている通り、レナックはこの際に、この花瓶を受けとるにあたってナンシーに、ガレの家まで来たものとみてよからう。

タツノオトシゴの浮き彫りをモチーフにした図案は船乗りたちの世界のものだが、ガレは1890年代頃に全くこれに取りつかれていた。だけど〔実をいうと〕この動物の名が人間の頭脳のなかの記憶を司る部分を指すということでドレフュス事件につながっているらしい。したがって、この花瓶は間違いなく、レナックの該事件に関する回想録著者として、また歴史家としての、もちろん法律家として論客としての才能をも合わせて、その先駆者の業績に対する敬意を表して進呈されたものだ（『Emile Galle Le verrier dreyfusard』Bertrand Tillier, 2004 P-75 関口煜訳）。

最近上記と似た内容をNHK教育テレビ「ガレ特集」の中で芸能人がコメントしていた。つまりガレのこの「海馬文花器」はドレフュス事件の人権擁護運動を忘れないようにというメッセージであったのではないか——というのである（NHK教育テレビ《日曜美術館》2005.6.27放映）。

こうした論調からガレがレイナック（関口訳ではレナック）に「海馬文花器」を献じたことは「ドレフュス事件と人権擁護の記念」にとどまらず「海馬」が「記憶」を司っている脳構造の一部であることから「記憶・回想」を比喻している——という主旨である。

そのような解釈はもっともらしく後世から見ると納まりが良いようである。がしかし筆者には何とも腑に落ちなかった。何故そのように感じたのか？ まずそれは事実と時代の前後が合わないのではないかという齟齬を感じたからである。では人々が見聞きする言葉として「記憶」と「海馬」の関連性はいつ頃から普及してきたのか？ それらの科学的知見の得られた年代をさかのぼって考察したのが本文である。

キーワード：海馬文花器，エミール・ガレ，ドレフュス事件，海馬と記憶

（1）エミール・ガレと「ドレフュス事件」

「ドレフュス事件」とはヨーロッパ19世紀末（1894－1906）フランスに起こった冤罪事件である（文－1，文－12，文－22 P41－52，文－24 P60－61）。

当時はドイツとフランスの国家間緊張が増大していた。当時の世相として社会問題「パナマ運河会社疑獄事件」がありフランス社会のユダヤ人に対する反感と排斥があった。当時レセプスのスエズ運河開通の成功を囃し更に次の事業としてパナマ運河建設を掲げた。やがて会社の採算が目に見えて悪化した後も引き続き国家が先頭に立って中産階級の資産を運河会社への投資に駆り立てた。政治家，官僚，ジャーナリスト達が一部のユダヤ人を買収されて成功の夢を喧伝し投資の名目のもと国民から資産を搾取したといわれる。



図－1 海馬文花器 1901
(Vase Hippocampus)
パリ装飾美術館蔵

後には国家的詐欺ともいわれた。フランスの経済不況の中で中産階級以下の国民の不満がいっせいにユダヤ人への反感・排斥へと集約していった。不幸にも同時代ユダヤ人成功者の一人軍人ドレフュスに影響が及んだ。フランスの参謀本部に勤務する軍人ドレフュス大尉にかけられた嫌疑（1984 夏）がこの事件の発端である。「ドイツへのスパイ行為という嫌疑」で獄に繋がれた。大尉は翌年仏領植民地アフリカのギアナ「悪魔島」^{注3}へ流された（文-1 P-55）。以後 5 年間牢獄に繋がれた。事件はその後スパイ行為の真犯人が判明し、1899 年大統領特赦という形で島流しからは釈放された。エミール・ゾラは「オロール（1 月 13 日号）」紙上に「私は弾劾する」を発表し続いて多くの文化人たちがドレフュス擁護の再審請求運動に参画していた。ガレはナンシー人権同盟を立ち上げ擁護運動に参加した他の人々と定期的に連絡・接触していた。有名な文化人としてエミール・ゾラ Emile Zola, ルイ・アヴェ Louis Havet J, ジョセフ・レイナック Joseph Reinach 等がいた。レイナックは連盟の書記をつとめ数巻に及ぶ『ドレフュス通信』を出版した。大統領命令の特赦（1899）で釈放されたが結局公式にフランス軍が〈ドレフュス無罪〉と認めたのはガレ死去（1904）後の 1906 年まで待たねばならなかった。当時の複雑な国際関係と世相の絡む事件でしかも 10 年以上にもわたって国論を二分した事件であったといわれる。

ガレはレイナックに 1901 年「海馬文花器」を贈った。（以下本文ではこの作品を限定するため「海馬文花器 1901」（または「海馬文花器（Hippocampus）1901」）とする。同型あるいは同名花器と区別するためである。）このガラス花器「海馬文花器 1901」のメッセージをめぐる近年前述のように新たな解釈と論評がなされている。この花器がタツノオトシゴをモチーフにしているのはレイナックの業績を記憶するように脳の一部の名前で表したのであるという指摘である。しかしそれは昨今の時流に乗った迎合的な拡大解釈ではないかと考える。ガレ作品は「物言うガレのガラス」「語る瓶」などとも言われている。ガレが何の表現を意図したのか。刻み込んだユウェナーリスの〈Vitam impedere Vero〉（真なるものにいのちを賭ける）の文句その文字通りの賛美であったと筆者は考える。そこでタツノオトシゴの解釈について幾つかの観点から時代考証を行った。つまり本論文はガレがレイナックに贈った「海馬文花器 1901」のメッセージ性に対する解釈、その時代の限界性についての考察である。

（2）「ガラス」は何を語る？ 「海馬文花器」に刻まれたオマージュ

ガレには〈verreries parlantes〉（物いうガラス）という作品群がある。作者のメッセージをこめて形に象徴的比喩を託したり文章や詩句などを刻み込んでいる。エミール・ガレはドレフュスの人権擁護に尽力したレイナック弁護士に「海馬文花器（Hippocampus）1901」を贈った（図-1）。一方この他にも同じ同型花器・同名花器が何点か残っている（図-2）（図-3）（図-4）（図-6）（図-7）（図-8）。

しかしながらこの「海馬文花器（Hippocampus）1901」には特に弁護士レイナックの名と共に『サトゥラエ』（文-3, 文-17）中の〈Vitam impedere Vero〉（真なるものにいのちを賭ける）というメッセージが刻み込まれている。底部にグラヴィールで「ジョセ

フ・レイナックへ エミール・ガレ 1901」(図-5, 文-7, 文-15) 基部に〈Vitam impendere Vero〉^{注1} (文-3, 文-17) と彫り込んでいる。エミール・ガレはガラス職人としての天職を通して「海馬文花器 1901」に謝辞と賛美のメッセージを記したのである。この花器は後年 1925 年ジョセフ・レイナックの遺贈品としてパリ装飾博物館に寄贈された。このように「海馬」をモチーフにした作品群の中でも本品は特別なものである。他の同名同型花器にはブランド名 Galle 以外特別な文字を書き加えていない。この「海馬文花器 1901」が歴史の記念品とされる由縁である。



(図-2 海馬文花器)
文-33 作品 No119
北澤美術館蔵



(図-3 海馬文花器)
文-33 作品 No121
デュッセルドルフ博物館蔵



(図-4 海馬文花器)
文-33 作品 No121
個人蔵



図-5 図-1 海馬文花器
1901 のサイン 65)
文-7 作品 No66



(図-6 海馬文花器)
デンマーク王室所蔵
文-26 P-15



(図-7 海馬文花器)
ナンシー美術館所蔵
文-26 P-42



(図-8 海馬文花器)
「ラ・ロレーヌ・
アルチスト」誌
(Tome 23) に掲載
文-28 P-62

(3) 「海馬 (hippocampus)」とは一体何か？

「海馬 (hippocampus)」という言葉には神秘的な響きがある。英語では sea horse である。

脳構造物の一部で解剖学用語の中でも変わった学術用語である。しかし多くの医学部卒業生にとって意外とイメージは希薄で明白に覚えていないようである。一方水棲のタツノオトシゴは学名 *hippocampus*^{注4} という。同じ綴りである。近年ジャーナリズムやテレビ教養番組の中で「海馬」という言葉が使われ耳にする機会がある。「記憶」「海馬」の連想は「アルツハイマー病」や「認知症」など「記憶障害」の病気が社会の注目を浴びるようになったのと同調するように注目されてきたのかも知れない。医師仲間に「海馬」とは一体どういうものをイメージしているのか？と口頭で訊いてみたが回答は必ずしも一定しない。面白いことに人によってそのイメージがかなり違っている。実に曖昧である。そこで「海馬」という語にどんなイメージを抱いているのかと周りの医者や友人で仲間達に口頭質問した。「海馬とは何か？」との口頭質問（35人）にまず反射のように「記憶に関係するもので——」とか「記憶の中樞で——」という答が多かった。つまり「脳内の海馬の生理機能」を質問の意味と考えた答えだった。常識としても「海馬すなわち記憶」という連想がほぼ普及しているようである。それでさらに説明と質問する。それに続けて「——いえそうではなくて脳の海馬とはそもそも一体どんなものを指し示す、何の名前でしょうか？」多くは医師である。多くの回答を得て始めて認識したが海馬のイメージは人それぞれにかなり違うものであった。結果多種類の回答を得た。しかし予想した傾向を得られた。それは本文で指摘した Bertrand Tillier らの飛躍を生む土壌になり得るものである。協力者の回答が多種類であったことも筆者には意外でまた興味がある。試みに分類してみた。詳しくは注釈として後にも記した^{注5}。

表－1 「海馬とはどんなもの、何の形ですか？」への回答

①タツノオトシゴ	15 名
②不明・分らない	10 名
③神話上の動物（海神が乗っているのが海馬）	3 名
④河馬（カバ）	2 名
⑤ジュゴン	2 名
⑥一回答：イルカ、鯨、貝（アンモン角 ^{注6} の意？）	各 1 名
合 計	35 名

上の中で①が最も多い。①タツノオトシゴ (*hippocampus*) と④カバ (*hippopotamus*) : 偶蹄類イノシシ亜目、それに⑤⑥は実在の生物である。①と④は両者ラテン学名の綴りも似ている。⑥は各 1 件ずつの答えが得られたものである。一方③の海馬は実在しない想像上の動物である。科学の現代、イメージが浮かびにくい名前である。しかしこの神話上の動物は実は西洋文化の生活環境の中では彫刻や装飾のモチーフとしてかなりありふれたものである。特にヨーロッパ文明の中では海神ポセイドン（ローマ神話ではネプチューン）が海馬に乗っている美術絵画や彫刻は数多く存在している^{注6}。ローマにあるバロック彫

刻の「トレヴィの泉」(図-9 トレヴィの泉)で海馬が飛び跳ねている。海神ポセイドンの息子トリトンに制御されているのが「海馬」(図-10)である。



図-9 ローマ・トレヴィの泉 (中央立像がポセイドン)



図-10 左彫刻海馬像の部分



図-11 海馬のイメージ
文-18 P150

人体の脳の一部に「海馬」という名前の構造物がある。大脳辺縁系の一部である。40年前の解剖学ではその機能についてはあまり言及されなかった。「海馬体」「アンモン角」とか「大脳辺縁系」などは術語としてのみ丸暗記したものだ。「海馬 (hippocampus)」とは何を意味するのか? hippocampus とは英和辞書によると

「①「[ギリシア神話・ローマ神話] ヒッポカムポス, 海馬《頭と胴は馬で尾はイルカまたは魚の怪獣, 海神の乗っている生物》②「タツノオトシゴ」③「解剖」(脳)の海馬, 海馬状隆起」などという和訳が載っている(「リーダーズ英和辞典」SHARP 電子辞書)。

そして現代, <表-1>で見たように医者でも「海馬」は水棲の小動物タツノオトシゴだと思っている人が多い。勿論名前だけのことであるから「海馬」をタツノオトシゴと考えて医学的実用的には何ら不都合はない。

しかし一方では以前から「海馬とは一体何なのだろう?」という疑問を持った人が少なくなかったらしい。なぜならば我が国でもこれらの疑問に対する解説や読み物が散見するからである。解剖学者小川鼎三が著書で言及している。その書『医学用語の起こり』(文-10)の中に「海馬の語源」に関する明快な解説がなされている。やや長くなるが以下に引用する。

「さて次に、やはり神話からでた解剖学用語の一つとして海馬（Hippocampus）のことを述べよう。大脳半球の側脳室の下角に Hippocampus という著しい隆起があり日本語では海馬として広く通用している。大脳半球の中で古い原始的な部分として興味深い。昨年、私はある人からその語源について質問をうけた。それはギリシア・ローマ神話にでてくる空想上の動物が起こりか、あるいは硬骨魚類タツノオトシゴの学名 *Hippocampus* が起源かという問い合わせであった。私はだいたい次のように答えた。

大脳半球の構造の一つに Hippocampus という名称を初めて用いたのはイタリアのアランチオ（Julio Caesar Aranzio 1530－89）であるといわれる。それはギリシア・ローマ神話の空想的動物の前脚を形態の上から連想したものであろう。神話の Hippocampus は海神が乗る車をひき、前半身が馬で後半身が怪魚の形をしている。その前脚は全体として弓なりに曲がり、膝の関節がないようである。タツノオトシゴは頭部が馬に似ており、尾が曲がっている特異な魚類だが、その学名 *Hippocampus* がいつ初めて作られたか知らないが、それが源をなして脳の構造が Hippocampus と呼ばれたとは考えがたい。タツノオトシゴの学名自体がおそらく脳とは独立に、やはり神話の海馬を連想してつけられたものとおもう。今アランチオの原著に接し得ないが、二、三の書によると、アランチオは *Pes hippocampi*（海馬足）の同意語として *Pes hippopotami*（河馬足）を用いたようである。カバ（河馬）はもちろん実在の動物である。日本ではいつから海馬の語が脳の一部に用いられたか確言できぬが *Zeepaard*〔蘭〕, *Seepferd*〔独〕, *sea horse*〔英〕の直訳であろう・・・（文－10 P100－110）。」

また星和夫がその著書『続楽しい医学用語ものがたり』（1996）の〔75〕馬尿酸の項で「海馬」に触れている（文－18 P－150）。

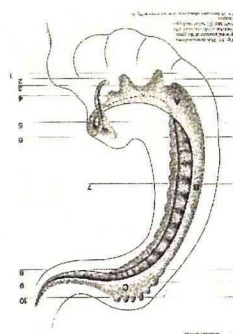
「このポセイドーンは海の神様ですが、いつも Hippocampus と呼ばれる怪獣を乗りこなしていました。この怪獣は前半身が馬、後半身が魚の姿をしており、前脚は全体に弓なりに曲がり、膝の関節はありませんでした。こんなことから、ポセイドーンは馬の神様、競馬の守護神としてあがめられています。のちになって、イタリアの J. C. Arantio（1530－1589）が側脳室の下角に一つの突起を発見した時、かれはその形がポセイドーンの乗っていた怪獣の前脚に似ていることから、Hippocampus（海馬）と名付けたのです。ついでに海の生物タツノオトシゴの学名も *Hippocampus* ですが、これもその頭部が馬に似ており、尾が曲がってる姿から名付けられたのです。」

このように医学用語辞典によると脳構造に「海馬」と名づけたのは上記（アランチオ）を嚆矢とする。しかも海神ポセイドンの乗り物海馬の〈膝関節のない前脚〉をイメージしたようだ（図－11 海馬のイメージ）。しかしながら現在では上記のように「海馬」の意味するイメージは人によって異なっており元の意味とかけ離れてきている。本来名前は記号でありどちらでも良いかもしれない。しかし人によってイメージが異なり一定でないということは何を意味するのか。専門家にとっても言葉のイメージが十分に定着していなかっ

たのではないか。脳構造の実物の図解と写真を次に示す。(図-12 人：海馬図)(図-13 人：海馬写真) 水棲のタツノオトシゴは写真や実物に触れる機会がある。海外ベトナムの道端や日本でも海辺の町で売っていたりする。その名もベトナム語では *Hippocampus* (タツノオトシゴ) のことを馬の魚「Ca Ngua (Ca = 魚, Ngua = 馬)」というそうである。海の馬ではない。日本での生物学的「海馬」の語への関心はあまり古いものとは思えない。

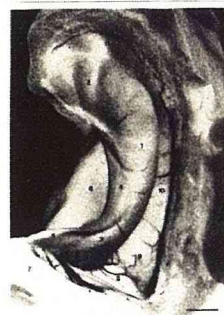
『岩波生物学辞典』第1版(1960)

には「海馬」の項目が無い。第2版(1977)以降の記載があり第3版(1983)を経て現在第4版(1996)まで出版されている。



(図-12 人海馬図)

文-11 P-78



(図-13 人海馬写真)

文-35 P-15

但し初期左の版を右の実物写真と方向を合わせるため上下逆にして図示している。

(4)「記憶と海馬」の関係についての年代順知見

記憶、物覚えは人間が人間らしくあるための大事な能力の一つである。個人差や文化、社会的背景による差違も大きい。実際診察した例でも「記憶障害」のケースは印象に残ることが多い。スポーツで強く頭を打った時や交通事故などで直前の事が思い出せない「逆行性健忘症」はよく見られる。

一般に頭、脳が「記憶」に関与しているという認識は現代では当然と考えられるが昔からそうだったのではない。古い時代常識から理解できないヒトの言動を「神がかり」とか「憑依」などと見なすことも多かった。これは洋の東西を問わない。しかし古代ギリシア、『ヒポクラテス全集』によれば「てんかん」を脳の病気と記載している(文-9「神聖病について」P111-132)。

とはいっても脳の特定位点とその機能の相関性についての研究が進んだのは古いことではない。近代以降、戦争時銃弾その他で頭部を負傷した人のその後の症状を観察することで脳の部分と作用の関連即ち脳の局在機能が研究されるようになってきた。また1848年の有名な鉄道工事爆発事故例がある。鉄棒が命中しフィアネス・ゲージの頭蓋を貫通した^{注7}。この事故で彼の大脳前頭葉と大脳辺縁系が脳内貫通で離断された。医者が貫通した頭蓋骨の穴の両方から指を入れてみると左右の指が脳の中で届いたという有名な症例である。この不慮の事故で脳に損傷をきたしたが一命はとりとめた。その事故後知性の欠落症状が顕著となったという。フィアネス・ゲージの例などを参考に脳の局在機能の研究が進んできた。彼の生命はとりとめ生活も出来たがその後大きく変化したのは「性格」で社会生活に適応できなかったという(文-30 P78-80)。

20 世紀に入ってから前頭葉連合野を外科手術によって左右ともに除去すると瞬時記憶 (immediate memory) が障害されるということから本格的に脳の特定期領域が障害されるとある種の記憶が障害されると考えられるようになってきた (文-2)。

「海馬と記憶」の関係が注目され始めたのはある一人の貴重な症例 H.M という患者の存在によってであった。1957 年 Scoville と Milner は「難治性てんかん」の外科的治療として海馬、海馬傍回などの両側側頭葉を切除した症例のうち 3 例で強い記憶障害 5 例で中等度の記憶障害が生じたと報告した (文-5, 文-30, P135-139, 文-31 P-272)。この重症 3 例のうち 1 例が H.M であり明らかに短期記憶、近い過去の出来事「短期記憶の障害」をきたしたのである。昔のことは比較的記憶が保たれているのに「短期」の健忘症が現れ社会生活は困難となった。H.M はその後ずっと研究者の対象となり最近 (1997) になってもなお種々の角度から調査研究されているという (文-30 P-138)。この外科手術を契機に「記憶の研究」は飛躍的に進んだ。患者であるこの H.M のケースはドキュメンタリー『記憶の亡霊——なぜヘンリー・M の記憶は消えたのか』として邦訳出版もなされている (文-20)。

1974 年には Penfield と Mathison が側頭葉健忘の 2 剖検例 (死後解剖) を発表した (文-31 P-274)。

この頃から「記憶のメカニズム」や「海馬と記憶」という術語が人々の耳に入るようになった。「脳外科手術の進歩」と「脳の機能と局在」の研究は決して無関係ではない。併行して進んだといえる。すなわち抗生物質を使った脳外科手術が出来るようになった第二次大戦以後、20 世紀後半から急速に進んだ分野といえる。どう遡っても考えてもエミール・ガレが活躍した 19 世紀末アール・ヌーヴォーの時代にそのような一般知識があったとは考えられないのである。

時間軸を混同しやすいもう一つの要素に「コルサコフ症候群」があるのではないかと考えている。ちょうど 19 世紀末、1887-1889 年に S.S.Korsakow が発表した画期的な研究がある (文-31 P-269)。アルコール依存症患者で時々見られる精神障害である。症状の一つとして記憶障害があり他の記憶障害のケースといささか紛らわしい。「コルサコフ症候群」とは健忘・作話 (虚談症ともいう、勝手な作り話をする)・見当識障害・病気の自覚欠如というような症状を呈する。患者に会って問診していると話の内容が始めと終わりで食い違ってきたりする。勿論本人には作り話という病識も悪意も全く無い症状で虚談症と言われる症状である。この病気のメカニズムも記憶障害という観点から興味深いものである。「コルサコフ症候群」が注目された頃、ちょうどアール・ヌーヴォーの時代であったがこの病因が「海馬」由来とされていたわけでは勿論無かった。現時点で発生している理由で混同するのも無理がないと思われる専門分野での要因がある。現代の神経科学者達自らが著作の中で脳の「海馬」を「タツノオトシゴ」として説明していることが時々見られる (文-27 P-53)^{注8} (文-30 P-133)^{注9}。

実用医学的には脳構造物「海馬」の名の由来はどちらでも問題はないと考えられる。本論は医学研究でもなく語源研究でもない。しかし上の様な「名前の意味」の経緯と変遷の

結果、「脳構造物の海馬はタツノオトシゴである、海馬は記憶を司る、したがってガレの「海馬文花器 1901」は記憶・回想の比喩・寓意である」という評論へと連想や飛躍が醸されたと考える。

昨今術語「海馬」が普通名詞といえるほど普及している。21 世紀の神経科学研究は「海馬」という言葉を巻き込み「記憶の研究」というテーマへと向う。未知の大きな分野である「アルツハイマー病」「認知症」「狂牛病」など最も現代的な問題へと合流していくようである。

（5）ガレ作品に見る「海馬」をモチーフとした作品

ガレのガラス器や寄せ木細工の家具作品を実物や本で見るとあたかも博物図鑑を開くような楽しいときめきを感じる。彼の自宅の庭園にはおよそ 3000 種の植物があり植物種の交配などもしていたという。生物観察も生半可ではない。微細な細密画を見るようでもありとりあげる形象は植物のみならず池や海の動植物、昆虫、貝また「ひとよ茸」ランプのようなキノコにまで及んでいる。森羅万象、博物図鑑の具象化とも見える。その中でも後期とりわけ「海洋学」「水の世界」に魅了されていたようである。また「海馬」のモチーフは「海馬文花器 1901」以外にも花器、家具のデザイン装飾に繰り返し使っている。花器家具などで過去の出版物などを通して「海馬」デザインを認識できた作品をここに掲げた図-1～4はピッチャー型の同型「海馬文花器」である。ガレがレイナックに献呈した「海馬文花器 1901」（図-1）は 1980 年に大阪での展覧会で見た。また同型同名「海馬文花器」（図-2、図-3、図-4）は 2005 年に中之島国際美術館で実物に接した。所在不明だが 20 世紀初頭ロシアへ贈られたリストにも同型花器の写真と記録が残っている。他に筒型の「海馬文花器」（図-6 デンマーク王室所蔵、図-7 ナンシー美術館）や別の形の「海馬文花器」（図-8 「ラ・ロレーヌ・アルチスト」誌（Tome 23）に掲載）がある。家具でも（図-14 海馬の小卓または彫刻置台（Gueridon））（図-15 小卓 Table-servante）の脚部分にタツノオトシゴを思わせる形が見られる。



図-14 海馬の小卓または彫刻置台
（Gueridon）文-23 P-55、文-16 P-17



図-15 小卓（Table-servante）
文-23 P-54

このようにガレ作品にはタツノオトシゴのデザインが少なからず見られる。タツノオトシゴの天然の美しい曲線を取りわけ気に入り頻繁に採用したのではないか。ガレが好んで使ったから作品が比較的多数残っているのだとも考えられる。

更にガレ作品の特徴の一つとして文章・詩句などを文字で作品に刻み込むこともあげられる。彼の心情を形象だけでなく具体的に言葉として刻み込みたかったようだ。引用はヴィクトル・ユーゴーが最も多いとされているが種々の方面からの警句や格言、箴言、詩句などに及ぶ。それらを文字通りのメッセージ、率直な心情の吐露と考える。従って「海馬文花器 1901」に刻み込まれた〈Vitam impedere Vero〉という言葉は文字通りの意味でレイナックに献げられたオマージュである。ガレの作品を考える時、解剖学用語の海馬をタツノオトシゴと混同してはならない。「海馬文花器 1901」のレイナックへの献呈を「記憶すべき、回想すべき偉業」とまで脳にこじつけて飛躍解釈するのは深読みによる誤解である。「海馬」文様に普遍的なメッセージを込めているとしたら複数の同型花瓶、家具の場合の説明がつきにくい。ガレには「パストールの杯」^{註10}のような記念品としての一点物という作品もあるのである。

〈結 論〉

- (1) 昨今ジャーナリストやメディアから発信するテレビ教養番組などで認知や記憶に関連して「海馬」という言葉が用いられている。しかし一般の人にとっても医学を学んだ者にとっても「海馬」という語からイメージされる動物は必ずしも一定していない。医師を中心に脳の海馬のイメージを口頭質問し結果を〈表-1〉に示した。
- (2) 「記憶と海馬」の関連が科学的に検証され始めたのは約半世紀（1950年代）くらい前からである（文-4、文-5）。19世紀末～20世紀初頭ガレの時代に世人一般の常識として「海馬」から「記憶あるいは記銘の中枢」という連想を引き出すというのは時代通念として無理である。
- (3) 記憶機能の中で「海馬」が関与しているのは「短期記憶」とされる。「海馬」では記憶が短時間蓄えられる。通過点であって記憶は高次の「長期記憶」へと確定統合されてゆく。それは高次の大脳連合野とされる。（文-4、文-27、文-30、文-31）。「海馬文花器 1901」がレイナックの活動を記念し後世の人々に「人権擁護運動を回想」させると解釈する事は「海馬」が「短期記憶」（＝ずっとでなくほんの短期間の一時的記憶あるいは記憶の処理過程）を司るので本来適当な比喻とは成りえない。一義的な意味付けに矛盾が生じる。即ち「記銘する」という「長期記憶」に関連づけるには大脳皮質連合領が関わらなければならないことになる。「レイナックの偉業を讃える」という意味を持たせたいのだとすると「記銘すべし、肝に銘じて忘れるべからずあるいは忘れない」という意味でなければならない。しかし「海馬」は「短期記憶」に関与するのである。上述のメッセージとして読みかえるにはまず前提に無理がある。

ガレはまず造形芸術家であると同時にガレ・ブランド、工房を率いる実業家であった。

製造途上壊れやすいガラス器や家具で気に入った作品のデザインで複数個、繰り返し制作するのはむしろ当然のことと考える。その中で特別な作品では作者の意志を明確な詩句や単純明快な比喻・寓意で表した。ガレは経済面においても知識・判断力においても心の独立した真の自由人、文化人であったといえる。だからこそ「ドレフュス擁護運動」に賛同参画できた。社会風潮に流され不和雷同となったり目先の取引利害で動くのとは一線を画している。自ら判断するという理性的行動がとれたのだと理解している。

〈おわりに〉

「ドレフュス事件」にまつわり、ガレの作品「海馬文花器（Hippocampus）1901」とその解釈について考察した。作品に関して近年出された説明と解釈への異なる見解である。美術、解剖、神経科学といずれも専門としてではなく分野を横断的に俯瞰して考察した。科学的知見の発見年代を尺度として検討した。ドレフュス事件はヨーロッパ史上最大の冤罪事件ともいわれる。同じようにフランスではヴォルテールを『寛容論』に駆り立てた「カラス事件」（文-25 P24-27）もあった。その被疑者たる父親は世論が興る前に既に処刑されてしまっていた。ヴォルテールをして「今後いっさいの私事を放棄して死ぬまで闘争を続ける」と言わしめた冤罪事件である。ガレの生まれたロレーヌ地方はかつてカソリックとプロテスタントのせめぎあう角逐の場であったのみならず中世には多数の名も無い女達が異端・背教の「魔女」と断じられ火あぶり処刑された地方でもある（文-13 P20-21）。人間の良心や判断力がいかに脆く危ういものであるか歴史を見るに論をまたない。しかしその中で時代の波に流されず理性も判断力も失わないヴォルテールの行動やドレフュス派の人々、また今に続く多くの心ある人々の行動は「人間の良心の灯」ともいえる。フランスは人権の国ともいわれる。歴史的「事実が事実として正確に伝わること」を願っている。ガレ作品に関して「解釈で後世美談化されたり誇大化されるのではなく実際あったように」解釈すべきと考える。それが本論の目的でもある。そして今更ながらに思うことがある。「言葉」という生き物は〈時代〉と〈学術用語〉までも巻き込みながら変身し時空を超えて独り歩きするものでもあるということ。

参考文献は分野が多岐にわたるため発行された年代順に掲げた。また本文中では敬称は省いた。古典『サトゥラエ』の著者名が訳者によって異なるので本文内では「ユウェナリス」に統一した。

多くの方々の協力を得て疑問点を考察した。原著『Emile Galle Le verrier dreyfusard』（文-32）全編を通して読むのに協力してくれた高屋大拙君、またその文中の正確な翻訳箇所は長年ソルボンヌ大学で教鞭をとっておられた関口煜先生、ラテン語についての示唆は本学非常勤講師佐藤義尚先生、ガレ作品を熟知している西洋骨董店主、ガレ研究家山根郁信氏、そのガレ展開催情報から作品を見る機会を得た鈴木潔氏、皆様の御教示に対し厚く感謝します。また「海馬とは何か？」という質問に回答を寄せられた友人に紙上を借りて感謝します。

〈注 釈〉

- (1) Vitam impedere Vero (真なるものに命を賭ける): ユウェナリス著『サトゥラエ』の中の言葉である。一般に「真実に人生をささげる」とか「真実に生涯をささげた」と訳されている。
この言葉は原典のラテン語では『IVVENALIS SATVRA IV 91 行目』(文-3)〈vitam inpendere vero〉となっている。ラテン語について〈Vitam impedere Vero〉は佐藤義尚氏(大阪外大ラテン語講師)によると古典ラテン語から変化したものであろう、普通現代では前述のように「n」は使わず「m」に置き換わっているとのことであった。ここでは関口煜氏訳を使用した。
- (2) 関口煜氏に正確な逐語訳を依頼した。氏は1956年から1996年まで40年間パリに在住された。元パリ第6大学教授(PFA マリーキュリー大学: 元ソルボンヌ大学理学部高分子化学教授)で現在大阪府在住。
- (3) 「囚人は島の内だけは自由に歩いていいのである。小屋に住んで荒地を耕すのである。けれどもドレフュスは、普通の囚人並に待遇することは出来ない。ほかの者から隔離して、列島の中一番小さいリルド・デュ・ディアブル(悪魔島)と云う、島より大きな岩の塊で、最近まで癪病患者を置いてあつたところへ、小屋を建てて監禁するのだった。」(文-1 P-65)
- (4) 脊索動物門・脊椎動物亜門・新鰭下綱・ヨウジウオ目 タツノオトシゴ *Hippocampus*
- (5) 回答は34名が医師、1名は元ヨーロッパ駐在大使である。質問への回答の結果は本文中〈表-1〉の通りである。①~③の数の分布は意外だが④⑤も興味がある。
④に「河馬」の答が2件あった。文-8『医学用語の起こり』小川鼎三著「アランチオは *Pes hippocampi* (海馬足) の同意語として *Pes hippopotami* (河馬足) を用いたようである。(P-102)」から考えて全く根拠の無いイメージとも言えない。また⑤⑥はそれぞれ水性の生物である。脳の「海馬」(大脳辺縁系)は別に医学的に「アンモン角」という名称も時代によってよく使われていた。エジプトのアンモン神頭部に見られる角の形にも似ているというのである。従ってこの「貝」という回答は「アンモン貝」との混同かも知れない。得られた回答にはそれなりの理由や説明もできる。実に色々な発想とイメージがある。また本論と直接関係はないが「タツノオトシゴ」の他に、似たような形の和名「タツノイトコ」や「タツノハトコ」といったヨウジウオ科の生物もいる。
- (6) 古代のギリシア・ローマ神話に題材をとった芸術・文化はヨーロッパ文明の底流にある。近代になっても前期ラファエロ派のクレインなどはこの「海馬」を好んで描いている。かれは襲いかかる海の高波を荒れ狂った海神ポセイドンとその海馬と見立てて描いている。またプロイセンからロシアに贈られ近年復元されたエカテリーナ宮殿「琥珀の間」彫刻にもポセイドンのモチーフがある。美術・神話のモチーフとしてはヨーロッパ社会において現代に至るまで普遍的デザインである。
- (7) 「フィアネス・ゲージの症例」として有名である。アメリカ合衆国ヴァージニア州の田舎町で1848年9月13日に鉄道工事現場で起こった爆発事故で鉄棒がゲージの頭蓋骨を貫通した。しかし彼はその後も命を長らえた。ただしその後大きな「性格変化」をきたし社会的責任能力は無くなったとされている。鉄棒が貫いたその頭蓋骨は今もハーバード大学に保存されている。
- (8) 「Hippocampus」という名称は、イタリア人アランチウス(Julius Caesar Arantius)によって提唱されたが、二つの意味を有している。一つは海神ポセイドンの乗った馬という意味から海馬が生まれ、他の一つはタツノオトシゴである。その後多くの解剖学者は海神の馬の意味をとってきたが、実際のヒトの海馬の断面はタツノオトシゴに似ている」(河田光博)
- (9) 「――記憶の神経科学的研究の過半数が海馬を扱っているといっても過言ではない。この部位は、とくに霊長類において、その形状がタツノオトシゴに似ているため、海馬と名付けられた。」(櫻井芳雄)
- (10) 「パスツールの杯」とは科学者パスツールの70歳誕生日(1893. 4. 30)を記念して高等師範学校の弟子達が恩師パスツールに贈るためガレに注文依頼したガラス杯。生命の神秘に挑んだ先駆的科学者に相応しくさまざまな象徴的趣向が凝らされている。

〈参考文献〉

- 1 『ドレフュス事件』 大佛次郎著 (1935) 改造社
- 2 *Studies of cerebral function in primates. I. The functions of the frontal association areas in monkeys*, Jacobsen, C. F. *Comparative Psychological Monograph* 13 (1936) P1-60
- 3 *Iuvenalis Satyra (Juvenal Satire)*, G. G. Ramsay (1950) *The Loeb Classical Library* William Heinemann Ltd
- 4 *The effect of hippocampal lesions on recent memory*, Milner, B. and Penfield, W. *Trans. Am. Neurol. Assoc.* (1955) P42-48
- 5 *Loss of recent memory after bilateral hippocampal lesions*, William B. Eecher Scoville and Brenda Milner *J. Neurol. Nerosurg. Psychiatry* 20 (1957) P11-21
- 6 *The hippocampus as spatial map, Preliminary evidence from unit activity in the freely-moving rat*, O'Keefe J. and Dostrovsky J. *Brain Research* 34 (1971) P171-175
- 7 『Emile Gale エミール・ガレ展』(1980) 日本経済新聞社
- 8 『ガレの芸術ノート』 エミール・ガレ著 由水常雄福岡田博(ほか)訳(1980) 瑠璃書房
- 9 『ヒボクラテス全集第2巻』 編集顧問小川鼎三・緒方富雄 翻訳岸本良彦他(1987) エンタープライズ社 P111-132
- 10 『医学用語の起こり』 小川鼎三著(1983) 東京書籍 P100-102
- 11 *The Human Hippocampus An Atlas of Applied Anatomy*, Henri M. Duvernoy (1988) *J. F. Bergmann Verlag Munchen*
- 12 『ドレーフュス事件』 ピエール・ミケル著 渡辺一民訳(1990) 文庫クセジュ
- 13 『魔女と聖女』 池上俊一著(1992) 講談社現代新書
- 14 *A synaptic model of memory: long-term potentiation in the hippocampus*, T. V. P. Bliss & G. L. Collingridge *Nature* (1993) 361 P31-39
- 15 『海馬の細胞構築と神経結合』 石塚典生著『神経進歩の研究 特集海馬』38巻1号(1994) P5-21
- 16 別冊『太陽』 アール・ヌーヴォー, アール・デコ(1994) 平凡社
- 17 『サトゥラエ 諷刺詩』 ユウエナーリス著 藤井昇訳(1995) 日中出版
- 18 『続楽しい医学用語ものがたり』 星和夫著 鈴木敏恵さし絵(1996) 医歯薬出版株式会社 P150-151
- 19 『岩波 生物学辞典』(1997) 第3版 岩波書店
- 20 『記憶の亡霊—なぜヘンリー・Mの記憶は消えたのか』 フィリップ・ヒルツ著 竹内和世訳(1997) 白揚社
- 21 別冊『太陽』 アール・ヌーヴォー, アール・デコⅣ(1997) 平凡社
- 22 『現代フランス政治史』 渡辺和行・南充彦・森本哲郎著(1998) 第二刷 ナカニシヤ出版
- 23 別冊『太陽』 アール・ヌーヴォー, アール・デコⅤ(1998) 平凡社
- 24 『ホロコーストのフランス—歴史と記憶』 渡辺和行著(1998) 人文書院
- 25 『世界の名著 35—ヴォルテール・デイドロ・グランベール』 責任編集串田孫一(1998) 6版 中央公論社 P24-27
- 26 別冊『太陽』 アール・ヌーヴォー, アール・デコⅥ デンマーク王室秘蔵のガレコレクション(1999) 平凡社
- 27 『海馬のホルモン制御の神経解剖学』 河田光博著『神経科学の基礎と臨床 8』 シリーズ—脳辺縁系(2000) 板倉徹・前田敏博編ブレイン出版 P53-62
- 28 別冊『太陽』 アール・ヌーヴォー, アール・デコⅦ 知られざるエミール・ガレ(2000) 平凡社
- 29 『馬の世界史』 本村凌二著(2001) 講談社現代新書
- 30 『記憶と脳』 久保田競編(2004) 2刷 サイエンス社 P177-178

- 31 『神経心理学入門』 山鳥重著 第1版23刷 (2004) 医学書院
- 32 *Emile Galle Le verrier dreyfusard*, Bertrand Tillier, (2004) *Les Editions de l'Amateur*
- 33 『Emile Gale エミール・ガレ展』 (2005) 日本経済新聞社
- 34 *Functional, structural, and metabolic abnormalities of the hippocampal formation in Williams syndrome*, Andreas Meyer-Lindenberg, Carolyn B. Mervis, et al. *The Journal of Clinical Invest.* (2005) 115 P1888–1895
- 35 *The Human Hippocampus Functional Anatomy, Vascularization and Serial Sections with MRI* Henri M Duvernoy (2005) *Thrid Edition Springer*

(2006. 10. 31 受理)